
スーパーロボット大戦OG～チートで歴史を変える少年

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG―チートで歴史を変える少年

【Nコード】

N8638M

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

神様の手違いによって殺され、チートな力を得た少年がスパロボOGの世界で愛したり愛されたりしながら戦場を駆け抜けるお話。原作なんて関係なくいくおゝ

少年は甦った（前書き）

間違いがあったので修正させて頂きました

少年は甦った

極めて遠く限りなく近い世界

「ここは……違う……」

誰かが呟く

「私は……過ちを犯した」

「探さなければ……『門』を開く『鍵』を……そして……創造主の下へ」

「やっとプロローグ終わったぜ、やっぱり何回やってもスパロボは面白いな」

部屋の画面に向かって一人呟く少年

「ふう、喉渴いたしコンビニでジュース買おうつと」

この行動が彼の人生を大きく変える事を少年は知らない

「つか、何で夏休みなのにこんなに人がいねえのかねえ」

ぶらぶらと歩きコンビニに向かう。地面をふと見ると何かが落ちていた

「何じゃこりゃ、何かの腕輪か？まあ、後で交番に届けるか……
なっ！？」

猛スピードで俺に向かってくるトラック、何故気がつかなかったの
だろうか

ブォーン、ガンツ、ドサツ

そのまま勢いを緩めずトラックは俺に激突して俺は意識を失った。

………

………

………

………

………

…

「いやー、参りましたねえ。まさか死んでしまうとは」

あれ？俺死んだんじゃないの？

「まあ、起きなさい」

ぺちぺちと頬を叩かれる

悪いが死んでるんだから眼を醒ますはずがない

「ええい、起きろ」

ガスンツ、鳩尾に一撃入れられ俺は眼を醒ました

「遺体を粗末にあつかうんじゃないぞ！」

あれ？俺生きてる？

「貴方は自分が死んだと分かってるんじゃないですか」

「あれ、て事はやっぱり死んでんの？」

「ええ、貴方は運悪くトラックに轢かれて見るも無惨な形で死にましたよ」

いや、でも俺こうやって話してるじゃ無いですか

「つまり、ここは天国です。と言いたい訳ですが貴方を逝かせる訳には行かないんですよね」

「天国っ！？」

つてことはコイツ神様？

「ええ、私神様ですよ」

あれ？何か心読まれてる？

「そりゃあ神様ですから」

「ですよー、で何で天国に逝けないんですか？」

いや、別に生前悪いことした覚えが無いんですけど

「ああ、それなら違います。貴方は手違いで死んでしまったので別の世界に飛んで貰う予定なんですよ」

「はあ、手違い？って事は俺を殺したのはおまえかああ！！」

「いやーごめんね、間違っちゃった。てへ」

偉く軽い神様ですこと、まて、別世界に飛んで貰うだって？

「ええ、何だったら行きたい世界の選択もさせてあげるよ？オマケ付きで」

「オマケ付きってどういう事なんだ？」

「例えばお金ちょーだいとかね」

うーん、死んだ実感湧かないなあ。それに何か違和感が

「だって貴方霊体だしね、早くしないと適当な世界にぶち込むわよ」

うわあ、良い笑顔ですな神様よ。

「じゃあ願い事をどうぞ」

「じゃあスパロボOG2の世界で、オマケはオリジナルの機体と俺の身体能力最強で頭も天才にしてください。あとは……………etc etera」

「貴方、遠慮ないわね。まあ、だいたい解ったわ。それで良いのね？」

もう考えつく事言っだし良いよね

「じゃあ、新しい人生楽しみなさい」

俺は足元に開いた穴に落ちていった

「神様のばかやろおお、先に言えよ！」

そして気がついたら俺は何かの中に座っていた

「ここはコックピット？いや、確認すれば早いか……………！？」

WARNING WARNING WARNING WARNING WARNING WARNING WARNING WARNING……………

モニターにはWALKINGの文字が浮かび、目の前のレーダーが赤く染まる。数はおおよそ三十機

「やっぱり俺死ぬ運命なのか！？」

くそっ、相手の機体は……………ゲシュペンストMK-？にソウルゲイ

ンって事はアクセル達か！？

通信回線を開いておく、いつでも会話できる様に。いや神様、ホントにすぐに思ったことの答えが出てくるから天才って凄いですね

（だって神様だもん、何でも出来るわよ）

「うおっ、頭の中に声が」

（良い反応ね 私に用があるときは読んでくればすぐに聞いてあげるわよ）

「神様、貴方は美人何ですからもう少し……………」

（あら、こんなこと話してていいのかしら？）

いつの間にか敵機が近付いて来ている

「もっと早く教えてくださいよ！！」

（いやよ、だって私が楽しめないじゃない）

「すみませんが今は戦闘を優先しますね」

（解ったわ、頑張ってね）

神様の声が聞こえなくなり集中力が高まる

武器はレールガン、大型アサルトナイフ二本、リボルビング・バンカーと五連チェーンガンにブーステットライフル、最後にエミュレ

ニオン・エッジ、あれ？最後の武器って俺の考えた機体の武装って事はこれってラグナレクなのか？

「えっと、機体情報展開つと」

機体名・ラグナレク

サイズM、万能型

マジで俺の考えた機体じゃんか

「神様、俺の夢を有難うございます」

試しに五感を最大限まで引き上げる。ラグナレクはフィードバックシステムを採用した機体でパイロットの能力も大きく反映される。某ガン〇ムのシステムを創造して作られている

「超速展開、分割思考、システムロール完了。行けますマスター」

それに追加して某魔法少女のインテリジェンスデバイスの人格より高性能なAIを搭載している。エネルギーは地上では空気中の水素を取り込み、宇宙では真空をエネルギーに変えて半永久的に起動出来る様に出来ている

「よし、行くぞラグナレク」

「OKマスター」

俺は大型アサルトナイフを両手に持ち戦場に駆け出した
SIDE アクセル

「突然リーダーに反応だと？」

「ええ」

おかしい、このタイミングだと連邦が来るはずなんだがな

「Wシリーズ、先に行ってアンノウンを出来るなら確保。無理なら最悪破壊してこい」

「了解」

それにしてもだ、俺はこの人形が好きではないんだがな。

さて、俺達と同じ存在か正体不明か。作戦に問題が無いのならどっちでもいいがな

「た、隊長!!」

「どうしたっ？」

「敵が強すぎます!!」

どういう事だ、Wシリーズはそれなりに使えるはずなんだがな

「解った、俺の本隊を連れてそっちに向かう。それまで耐えろ」

「了解」

「ソウルゲイン、アクセル・アルマー行くぞ」

とりあえず様子見だけでもしておくか

SIDE OUT

「よし、三十機撃墜完了。意外に楽だったな、ラグナレク？」

「ええ、予想より下の戦闘でしたね」

「まあ、俺達チートだし」

「マスター、チートとは何ですか？」

ありや、語源設定までは完璧じゃないのか

「まあ、後々教えるよ」

「解りました」

「つと、まだいたのか」

しかもソウルゲインか、どうしようかね。まあ、話してもして逃げるかな

回線を通して声が聞こえる

「おい、貴様何者だ？」

まあ、確認も兼ねて聞いてみるか

「俺はただの民間人だが、いまはそれはどうでもいい。」

「なに!？」

「もうエクサランスのパイロットは誰か知っているか？」

多分今の時点では知らないはずだ

「何を言っている?。」

「情報提供どうも。ラグナレク、ハイパージャマー」

「了解」

「逃げられると思うのか？」

「逃げるんじゃない、消えるだけだ」

ラグナレクがレーダーから消える

「何処だっ!!」

悪いが今は逃げるのがベストだしな

「くっ、逃げられたか」

ソウルゲインが後ろを向き部隊に戻っていった

「とりあえず今は隠れ家でも探さないとな」

「隠れ家とは？」

「ああ、俺達はしばらく隠れながら情報を掴む」

実際のところ今はどの時系列に存在しているのか気になるしな

しばらくはジャマーで野宿覚悟でいくか……

「ああ、何か異世界に来たって実感が湧かないなあ」

「？」

「気にしないでくれ、ラグナレク」

（くすくす、貴方も面白い人ねえ）

突然頭に声が響く

「うおっ！ー！」

ゴチンッ、と頭をコックピットにぶつける

「どうしましたかマスター？」

「い、いや、何でもない」

（無視するなんて酷いわねえ。しくしく）

おい、今時しくしくなんてやらねえよ

えーと会話するには頭で言葉に……………って、これ聞こえてる！？

（ええ、バツチリ聞こえてるわよ）

やべえ、何かにこにこしてる気がするよ

（もちろんにこにこしてるわよ）

やめてくれ、そうだ無心になれば……………なれねえよ！

（まあ、全部聞こえるしこれ以上からかうと話しが進まないからやめるわ）

本当この神様俺で楽しむためだけにこの世界に送ったとしか考えられん

（実際そうよ あと貴方、腕輪はまだ持ってる？）

断言しやがった、ん？腕輪って……………これか。これがどうしたんだろうか

（それ無くしちゃダメよ。理由はめんどくさいからいいわ）

随分アバウトな神様デスこと

（あと隠れ家が欲しいんでしょ？私が用意しておいた場所があるからそこを使いなさい。座標は貴方の機体に入れておいたわ）

「ラグナレク、隠れ家で座標を出してくれ」

「了解」

（うふふ、多分出るはずよ）

多分つてのが気になるんですけど

（頑張つて男の子）

とかやってるうちに座標がでる

「座標出ました、位置はだいたい……………この辺りです」

モニターに地図が出て黄色い点が表示される

「俺地形よくわかんねーから自動飛行頼めるか？」

「了解です」

という訳で自動飛行に設定したのだが

「やべえ、揺れも無いし飛行音とかバーニアの音すら聴こえねえ」

非常に乗り心地がよくて寝てしまいそうだ

「ぐっ」

少年睡眠中……………約一時間後

「マスター、到着しました」

「う、うん？ ああ、着いた……………のかあ」

欠伸を漏らしながら確認を取る

「到着したはいいのですが此処は？」

目の前に広がるのは瓦礫の山

ちよつと待て、隠れ家だよな此処は？

（大丈夫よ地下があるから）

先に説明して下さいよ

（入口はあの石像の下よ）

無視ですか、都合が悪くなるとそつくるんですね

（じゃあ頑張つてね）

何を頑張ればいいのだろうか

ついでに、いまさらになるが俺の名前は浅上遼だ

こっちでの戸籍がどうなっているかなんて知らないから後で調べるつもりだったが

「結構広いな。それにこれは……………」

格納庫にラグナレクを置いて部屋に向かってみると使われた形跡の

無いオペレーションルームがあった

「新しいな。神様本気で楽しむつもりですね」

（ええ、貴方は仲間でも集めたらどうかしら？）

「それは後々やるとして、戸籍とかはどうなっているんですか？」

（無いわー！！）

速攻で断言された、まあ予想の範囲内だが

「何とか出来ませんか？」

（仲間作って戸籍改竄しちやえは良いじゃないの）

「聞いた俺が馬鹿だった」

この会話から一年後に俺は過去に飛ぶのだった

少年は甦った（後書き）

間違いの指摘をしていただきありがとうございます

まだまだ至らない所が多いですがよろしくお願いします

少女と少年は何を思うのか（前書き）

しばらくはオリジナルストーリーで行きます、本編はしばらく後に
なります

少女と少年は何を思うのか

隠れ家の掃除が終わり、俺は備品を買い集める為に近くの街まで買い物に来ていた。そして何故かお金は金庫に大量に入っていたので必要な分だけ持って来ている。

ちなみに神様が言うには「貴方の生活、その他の事に必要がある物はある程度だけどそこに置いといたから人生楽しんでね」だ、そうだ

てくてく

まあ、食料やら生活用品が無いので車と家具を揃えないといけないな。近くに大型の百貨店あるかな？

てくてく

必死に見ない様になっているんだが何故か俺の後ろをまだ8〜10才にしか見えない少女がついて来ている

てくてく、ぐうぐう

お腹が空いてるのか？仕方ないな、金が無い訳では無いので少女に話し掛ける

「おゝい、お腹空いてるなら何か買ってやるからこつちおいで」

手招きを小さくやると少女はとてとと走って来た

どてっ

あ、転んだ。何か痛そうだな、頭でも撫でてあげるか

手が少女の頭にのる

なでなで、少女は眼を細め気持ち良さそうにこっちを見上げて言った

「お兄ちゃんありがとう」

「いやいや、お礼なんていいよ」

見た感じは可愛い、きっと将来は美人だな

「ところで君の名前教えてくれないかな？」

「いいよ、私はルナっていうの」

ああ、そうだった。こっちの名前ってゲーム上ではカタカナなんだっけ

「ルナちゃんね、家族は一緒じゃないの？」

「家…族？私の家族はもういないの」

いない？もしかして戦災孤児か。

「どこで暮らしているんだい？」

「独りでお家にいるよ」

そっか、まだこの歳なのに一人は辛いよな

「お兄さんと一緒に暮らさないかい？少し平和とは離れちゃうけど」

ルナちゃんが俺と暮らしたいなら俺はこの娘を引き取るかな

「いいの？」

「本当にいいよ、買い物ついでに子猫拾ったみたいなものだし。何より俺が誘ったんだから」

ルナちゃんは少しも考えることなく俺の手を握ってきた

「迷惑かけるかもしれませんがよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げた、手を握っていたから少し苦しそうだったがニコニコしていた

「こつちこそよろしくねルナちゃん。あと俺の名前はリョウだから好きに呼んでいいよ」

「うん、じゃあお兄ちゃんって呼んでいい？」

「良いけど何でお兄ちゃん？」

確かに年上だし疑問はあまりないが少し抵抗がある

「優しい匂いがするから」

えへへ、と小さく笑い横に並ぶ

「じゃあ先にご飯食べにいこうか」

「うん、ルナはケーキ食べたいな」

ま、仲間では無いけど家族にならなれるかな？

少女少女食事中〜約2時間後

「結構食べたねルナちゃん、太っちゃうよ？」

「太んないも〜ん、私運動もするもん。あと、ちゃん付けないでいいの〜」

顔を膨らませてポカポカと叩いてくる

「じゃあルナって呼ぶけどいいのかい？」

「うん」

「じゃあいろいろ買ったし一回帰ろうか、ルナ？」

「買ったってさっきの車とかのこと？」

さっき食事をする前に車に家具一式と服を買っておいたのだ。いつの間に買った？とかは秘密だぜ

「そつだよ、欲しいものあったら今度買ってあげるからね」

「ありがとうお兄ちゃん。」

ルナを助手席に乗せて車を出す

「お兄ちゃん運転上手いね、全然揺れないよー!!」

ルナは誰かと一緒にいる事が嬉しいのかとにかく元気だ

「ありがと、でも少し静かにしような」

「うん、ごめんなさい」

言えばすぐに聞いて直せるってのは凄いことだな、手がかからないぶんちゃんと一緒にいてやろう

と俺は誓いを心の中で立てたのだった

そして、隠れ家に到着した

「此処がお家なの？」

まあ、当然の反応だな

「そうだよ、此処がお家だよ」

「お兄ちゃんってお金持ちなのにお家無いの？」

「冗談だ、お家はこの下。地下だよ」

少年説明中

「わあ、広いね」

最初の俺と同じ事言っただよこの娘

「生活区は此処までだから用が在るとき以外はここで暮らすから」

ちなみに格納庫やオペレーションルームの説明も一応したら、ルナが

「私も乗りたいな」

と言ったのでラグナレクをもとに設計図を作成する予定だ

「じゃあ、部屋の模様替えするからルナも手伝ってくれるか？」

「わかったの」

ルナは大きく手を挙げて頑張るぞーと言っている

「あ、そうだ。聞き忘れたけど同じ部屋でいいの？」

「そっちのほうかルナ嬉しいな」

「じゃあタンスとかの位置決めないとな」

少年少女仕事中

「よし終わった」

「終わった」

ルナは疲れたのかうとうとしながら言っていた

「少しルナは寝ようか」

「うん、寝るの」

ルナを抱き上げてベットまで運ぶ

「すうすう」

運んでる最中にルナが寝てしまったのでほっぺを突いてみる

ぷにぷに、柔らかい。ルナは「ふにゅ〜」と鳴いたが起きなかった
のでそのままベットに寝かせてあげた

「さて、俺は設計図でも描きますか」

これは少年が少女を街で拾ってきたお話

少女と少年は何を思うのか（後書き）

意外に読んでくれている人が多くてビックリした作者です

駄作ですが読んでくれる方々がいるかぎり私は頑張るつもりですの
で何とぞよろしく願います

駆け抜けること

俺はルナの為に設計図を描いていた。機体名はナイトメアと名付け、今は機能面での考察中である。構想設定は大分浮かんでいる、説明をするならこうなる

- ・ステルス（ハイパージャマー）による一撃離脱を基本とした機体
- ・小型のサイズで敵を攪乱する
- ・高機能AIによるサポートが出来る安全設定

まあ、こんなものだよな。まずルナは戦争に参加させたくないが身を守るという点もあるから仕方ないな

ガチャッ、という音と共にドアが開き茶髪の少女が突っ込んできた

「お腹すいたよお兄ちゃん ああ〜ん」

ドガッ

「ぐへえっ、ちょ、ルナ。痛いからやめてくれ」

「お腹すいた〜、ご飯〜!!」

「わかったから、ご飯な？今作るからちよつと待ってち」

俺がいい終える前にルナは「わかった〜」といい俺の服の袖を掴んでキッチンに引っ張って行こうとする

「わ、わわ。引つ張んなくても行くから」

俺は設計図を引き出しにしまいルナとキッチンにむかった

…………少年料理中

…………少女お手伝い中

「出来たからルナはテーブル拭いててくれないか？」

俺はフライパンを火から下ろし皿に盛りながらルナに頼む

「うん、わかった」

え〜と、中華だし箸でいいかな？

テーブルに料理を運ぶ、メニューはチャーハン、麻婆、エビチリの
三種類だ

どうやらルナもテーブルを拭き終えているようだしちょうどいいな

「ルナ、キッチンから箸とお皿持って来てくれないか？」

ルナは頭をこくりと振りぱたぱたと走っていき、戻ってきた

「持ってきたよ」

「うん、有難うな」

椅子を引き、テーブルに着く

「じゃあ食べようか、ルナ」

「うん、頂きまゝす」

ルナは一通りお皿に盛ると箸を手にとり食べている。その顔はとても美味しそうに食べているので作った本人としては嬉しいものだ

「じゃあ俺も食べるかな」

まずエビチリを食べる、久しぶりの料理だけど大丈夫だな、チャーハンと麻婆も食べるが特に問題も無く美味しかった。

ぱくぱく、もぐもぐ、ごくん

「「ごちそうさま（でした）」」

二人仲良く挨拶をすると皿を洗い俺はオペレーションルームに向かった

「ルナ、ちょっと出掛けるからいい子にしてくれよ？」

「うん、わかったよ」

ルナが部屋に戻るのを確認してからオペレーションルームに入った

「さて、ハッキングでもしますかねえ」

すべての機械に電源をいれる
液晶に文字が映る

『パスワードを入れてください』

パスワードなんて知らない、なにを打てば良いのだろうか？

（えーとね、パスワードは大神宣言グングニルよ）

いい加減慣れてきた、いやゝ慣れっていやだね

（ちょっと、人がせつかく教えてるのになによ）

まず人じゃあ無いですよ、神様ですよあなた

（うう、酷いわりヨウ君）

てか、いつの間にか名前と呼ぶようになったんですか？

（デフォよデフォ）

意味が違いますよ？

（……………うわーん（泣））

あ、ガチ泣きして逃げた！？

後で謝ん無いと命がああああ

まあ、大丈夫かな？とりあえずパスワードを入力しないとな

カタカタカタカタカタ

ピー、ピー

『承認完了、アクセスの許可ができました』

これでいろいろと調べる事が出来る

まずは片っ端から軍の研究所とか施設を調べるか

カタカタカタカタカタ

ブロックがきついな、けどそんなのじゃ俺からは逃げられない

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

『アクセスを開始します』

やっと通った、えーと裏にアクセスしないとな

カタカタカタカタカタカタカタカタ

『検索にヒットした件数2500』

更に絞り込まないとダメだな。何かキーワードは……………改造？いや、強化だ

『絞り込み中……………検索性数15、ページを開きます』

15件か、予想以上に少ないな。これは用紙にコピーをかけてつと、後は軍人の名簿と顔写真、それと量産機体の資料を見つけないと

ピー、ガッガッガッガッガッガッ

ウィーンウィーンウィーン

ガッガッガッガッガッガッ

ウィーンウィーンウィーン

ピー

『印刷が完了しました。』

終わったみたいだな、とりあえず見てみるかな

ぺらぺら、ピタッ

これは酷い、生存者は三人だと？しかも子供だ

「この人数なら助けられるな、仮に仲間にも出来る」

まあ、仲間になるなら置いといて助けに行くか

パソコンの電源を落とし、印刷した資料を纏めるとそれを設計図の入った引き出しにしまう為に部屋に戻った

「これで本当にお出かけだな」

お昼寝をしていたルナの頭を撫で「行ってくるよ」と俺は言い格納庫にあるラグナレクに乗り座標を指定する

「ラグナレク、今回は殲滅戦だ。行くぜ」

「了解しました、マスター」

モードをハイパージャマーに設定して自動飛行に変える

…………少年移動中…………

「着きましたマスター。」

「結構速かったな、今回で完璧にお前に慣れる為に頑張るよ」

俺はラグナレクで研究所の壁を壊した、勿論誰も居ない倉庫を破壊した。何だかんだ言っても人を殺すのは嫌だ、責任を持つのが嫌ではないし寧ろそれは割り切れる事だ。

まあ、もう覚悟はあるさ。それくらいの事を俺はこれからもやり続けるんだからもう割り切ろう

「よし、ジレンマはもう克服した。子供達を助けるか」

その時警報が鳴り響いた

「くそ、もう気付いたか」

レーダーの反応数はだいたい8機、まあこんな研究所じゃ良い方か

俺は回線を開いて告げた

「聞け！俺はROKIだ、貴様等の醜悪な実験を受けた子供達を貰いに来た。素直に受け渡すなら見逃してやる」

「何処だ！？姿を現せ！！」

リーダーに反応が無く慌てている様子がまるわかりな返答が帰ってくる

「答えを言った後に出てやる、先に答えろ！」

「くっ、貴様の様な得体の知れない者に実験台を渡すかっ！！」

その一言が俺の何かを切った

プチンッ

「答えはNOで良いんだな？」

苛立ちを隠せずに声に出てしまう

「さあ、答えたのだから姿をあらわ……せ！？？」

ヒュンヒュンヒュン、ザンッ

敵の機体の首が跳ねられ手足を切り裂かれていた

「お前等は此処で始末する、姿を見られたら殺さないといけないんでね」

正にそれは一瞬の事だった。黒い影が現れた瞬間に残り七機はバラバラに解体され爆発した

「さあ、お前が最後だ。覚悟は出来ているか？」

「は、は、はは、化け物め……………」

「ふん、自分の愚かさに気付けぬまま死ぬか。じゃあな……………」

俺はリボルビングバンカーでコックピットを貫いた

「魂に価値があるならお前等はどれくらいあったのかな？」

俺は何故か呟いていた。何故かそれはとても悲しくて悔しかったかなのかは解らない。

ただ一つ言える事は子供達を助ける為に俺はやったという事実のみだ
そんな事を考えながら俺は子供達のいる部屋に入った

そこにいた少年と少女は震えていた。毎日の実験に怯えて居たのだ
ろう

「お、お兄さんはだれ？また僕らを虐めに来たの！？」

二人を守る様に一人の男の子が俺に聞いてきた

「此処から逃げたいって思った事はあるか？」

俺はそんな事と一蹴し少年に尋ねた

「当たり前だろ！こんな場所逃げれるなら逃げたいさ」

「だったら一つ聞こう、俺と……家族にならないか？」

俺は堅苦しい言い方をやめて聞いてみた

「俺は君達のような存在を救う為に今此処にいる。どうだい？」

「そ、そんな……おい、カンナ。何を！？」

カンナと呼ばれた少女は俺の所に来て俺の顔をマジマジとみて言った

「この人、いい人だよティード、ヴァン君。とても綺麗な眼をしてるもん」

「カンナ、何をいつて？」

「お兄さん、私家族欲しいよ」

この少女は不思議な何かを持っている気がした

絶望的な状況で生きてきたはずなのに心がしっかりとしていた

「ああ、君がそういうなら歓迎しよう。そっちの二人はどうするか？」

「カンナがそういうなら俺も家族になる」

ティードと呼ばれた男の子は俺の眼をまっすぐに見つめて言った。
それに倣うかの様にヴァンという少年もお辞儀をしてきた

「じゃあ三人は俺の大事な家族になった訳だ。家に帰ろうか」

「うん」

カンナという少女は俺の手をしっかりと握り歩いていた。もう二人は
後を追う様について来た

「ラグナレク、乗れるか？」

「なんとか入るでしょう」

俺がラグナレクと話していると三人は眼を光らせて聞いてきた

「何て言う機体な（の）（んだ）」

「とにかく先に乗ってくれ、帰れないだろ？」

「「「わかったー！！」」」

こりゃ、後三機は設計図描かないとダメだな

…………… 少年少女移動中」

「着いたから降りるぞ」

三人に向かって言う、三人は素直に降りたが眼がかわいそうな人を見
る眼をしていた

「待てまで、此処の下だ」

まあ、ルナも勘違いするくらいだから仕方ないか

「下？地下にあるの？」

「そうだ、入るぞ」

入口の扉を開いてなかに入っていく

「ようこそ、我が家へ」

格納庫を越え生活区に入ってから三人は初めて見る環境に驚いていた

「あ、お帰りお兄ちゃん」

「ただいま、ルナ。早速だけど新しい家族を紹介するよ」

俺の後ろでキョロキョロとしている三人を前に出す

「さあ、自己紹介だ」

「私はカンナです。貴女は誰？」

「ルナって言うの、お兄ちゃんに拾われたんだ」

何故そんなに嬉しそうなんだ、ルナ？

「俺はティード、一応三人の中では兄貴みたいな立場だ。よろしく」

「僕はヴァン、仲良くしようね」

「という訳で、晴れて俺の家族になった訳だが先に一つ言っておくぞ」

四人は振り返りこっちを見る

「世界は一つじゃない、俺は近い内にこの世界を離れるつもりだ。そこで一つの確認をする、俺について来るかについて来ないかを」

「お兄ちゃん、どういう事？」

ルナは意味が解らないと俺に聞いてきた

「俺は別の世界でやらなきゃいけない事があるんだ。それにお前達を無理矢理連れて行くなんて俺には出来ない、だからお前達の言葉を聞きたいんだ」

「お兄ちゃんは私たちの事をどうしたいの？」

「本当は離れたくないさ、俺が拾って家族にならないかなんて言つて連れて来たんだからさ」

そつだ、置いていくなんてのは無責任じゃないのか？

いや、でも俺の意思では勝手に決めちゃいけないだろ？

二つのジレンマに焦がれる俺にルナは言った

「私はお兄ちゃんがいるなら何処にだってついていくよ?」

その言葉は俺にとっては救いだっただ、その言葉に倣うかの様に残りの三人も言ってくれた

「僕(私)達もついて行くよ」

「有難う、これで俺も家族として暮らせるよ。ちなみに別世界ってのは極めて近く限りなく遠い世界だ、間違いなく今よりは幸せな暮らしを俺が絶対に約束してやる」

話を終えると新しい家族に部屋をあげた。

そこから一年はとてもとても幸せに家族みんなで暮らしていた

そして運命の日、俺はその日に間に合う様に神様に設計図を渡して機体を改めて四機創って貰った

(今回でリヨウ君の手伝いは終わりね、後は私は観測者として傍観させて貰うわ)

今まで有難うございました神様、でもまた気が向いたら俺と話すつもりですよ?

(あら?なんでそう思っのかしら)

俺が知る神様はそういう神様だからですよ

(嬉しいこと言ってくれるわねリヨウ君)

いえいえ、じゃあ俺達は先に行きますね

（わかったわ、じゃあ最後まで見届けてから私は行くわ）

じゃあ言ってきます。

「行くぞ、ルナ、カンナ、ティード、ヴァン」

「『『『了解』『』『』』」

「No・0ラグナレク行くぞ、ついて来い」

「No・1ナイトメア、了解です」

「No・2フェンリル、わかりました」

「No・3ケルベロス、良いぜ了解だ」

「No・4ヘイムダル、了解です」

それぞれに専用の機体を預け、今頃エクサランスを奪おうとしている
アクセルの所に向かったのだった

「誰ひとり殺させはしない!!」

そう一人リヨウは呟いていた

駆け抜けること（後書き）

次回からやつと本編に入れそうです

始まりの出撃（前書き）

やっとラウルやアクセルが出てきました、本編にどうやってリヨウを介入させるか物凄い悩みます

では、お楽しみ下さい

始まりの出撃

SIDE アクセル&ラウル達

「青龍麟…………命中精度と威力はなかなかの者だ。とはいえ、俺向きの武装ではないがな、こいつは」

まあ、確かにコイツは使いやすいがな。エクサランスは取らせて貰おう

「あれは!?!」

「ソウルゲイン…………!!」

「テスラ研で開発してたっていう特機か!」

「ええ…………。あそこは確実に敵の手に落ちたようですね」

エクサランスのパイロットは母艦と通信しているのか…………ならば今が良いな

「…………さて、始めるか。各機、そのまま待機だ」

「了解」

とりあえず確認だが、しておくか

「エクサランスのパイロット、聞こえているな?」

「！」

「貴様の機体をこちらに渡して貰おう、輸送機に収容されている物も含めて全て、だ」

「だ、誰がDCの残党何かに！」

何か勘違いしているな

「DCの残党だと？フツ……それで構わんさ。俺が誰であろうと、貴様がすべき事は変わらん、こいつがな」

「何……！？」

さあ、選択肢をやるう

「…選択肢は二つ。エクサランスを渡すか、抗うかだ。交渉の時間はない。大人しく従うのならば、身の安全は保証する。だが、抗うのなら……次はコックピットに当てねばならん」

「くっ……！！」

「ここまでですね、ラウル」

突然の事にラウルと呼ばれた少年は驚く

「ラージ！？」

そして、ラージと呼ばれた青年は冷静に答えた

「彼らの要求を受け入れるしかありませんよ」

「だけど!」

「冷静になって下さい。多勢に無勢、しかもフィオナは気を失っている……今は全員で生き残る事を考えるべきです。命と機体が無事なら、研究を続ける事が出来る……。例え、一からやり直しになっても」

その言葉はラウルにも痛いほどにわかっていた、なので何も言えない

「僕が先方と話をしてみます」

ラージが回線を開きアクセルに意見を述べる

「……先程の言葉、身の安全を保証すると言う話……信じて良いんですね?」

ふ、殊勝な判断だ

「ああ、俺の信じる戦争に誓って……なに!?!」

「!?!何だ、この反応は!?!」

ラウルの近くで爆発が起きた

「うわあっ!?!」

「何!?!」

爆発の起きた場所に何かの異業が現れた

「あ、あれは………！？」

「何だ？起動兵器か……！？いや、そうは見えん。それより、奴は何処から現れた？」

アクセルが何かを呟いていると、異業が何かを言い始めた

「……発見……。利用……する……」

呟きが終わるとラウルが乗るエクサランスに何かの力が働いた

「タイムタービンが……！出力が勝手に！？」

「ラージさん、この反応は！」

母艦に乗っている女性が驚きながらラージに聞いた

「ミズホ。いや、時流子が漏れている？いや、これは！まさかあの物体が！？」

それを好機と思ったのかラウルが

「この出力なら……いける！！今のうちにフィオナを！」

「いい状況判断だ！だが甘いな、こいつが………！」

それを見越していたアクセルが反撃にでる

「何っ!？」

「抗うなど言っただぞ。覚悟は……出来ているだろうな」

「!?!」

アクセルが白虎鯨を放つ、フィオナが目覚めラウルを庇おうと前に出ようとしたその時。

「悪いがそれを当たらせる訳にはいかないんだよ、アクセル!！」

SIDE リヨウ

「悪いがそれを当たらせる訳にはいかないんだよ、アクセル!！」

ふう、間に合ったか。フィオナは無事だろうか

「この近接の大型アーミーナイフ……お前はあの時の!！」

「ああ、久しぶりだな。隊長殿、失念していたか？俺のあの時の台詞を思い出してみる……」

「くっ、そういう事だったか。貴様、何処の所属だ!？」

ふ、やっと名乗れるか

「よくぞ聞いてくれたな、俺達は」

名乗りをあげようとすると次々に残りの機体が現れる

「神々の黄昏。ラグナロクだ、独自のレジスタンスだ。俺は今はR
OKIとでも名乗って置こうか」

名乗りをあげるとエクサランスから通信が入る

「誰かは知らないけど助かりました」

フィオナの声思っていた以上に可愛いな まあ今は驚かせてやるか

「礼はいい、お前に死なれると俺の計画が狂うから助けたただけだよ、
フィオナ」

「！？何で私の名前を……………」

「その話はまた後だフィオナ。さあ、アクセル。大人しく退いては
くれないか？」

「くつ、貴様には借りがあるのでな。従わせて貰う、退くぞお前ら」

意外に聞き分けが良いな。よし、後はあの原因を潰す！！

「デユミナス、今回は此処で消えてもらおう！！行くぞ家族たち」

「……………了解……………」

「何故……………抗う……………異世界の……………住人よ……………いや……………死人……………
……………よ」

一応流石はこちらでの創造主と呼ばれただけはあるな、俺が転生者
つてのを一発で見破りやがった

「黙れ、お前は俺に出逢った時点で朽ちる運命なんだよ」

「ならば……こちらも……」

発光をし始めたと思うと同時にエクサランスが襲い掛かってきた

「な、なんで！？機体が勝手に！！」

「くそ、どうしたんだ！？」

そうか、そうくるかデュミナス

「ルナ、ティード、ヴァン。エクサランスを傷つけない様に抑えて
くれ」

俺の家族達はそれに一言「了解」と言うと素直を行ってくれた

「カンナは援護だ」

「分かった」

後は、ミズホとラージに確認しないとな

「おい、聞こえるか？ミズホ、ラージ」

「何で私たちの名前を………？」

「もうその前振りの良いから早く聞いてくれ」

「え？あつ、はいっ」

ダメだ、ミズホちゃんだと話が進まん

「ラージ、エクサランス少し壊すが良いか？」

「はいっ！？」

「分かった、俺は聞いたからな！！」

とりあえずは転移に巻き込まれないとな

「お前ら一旦引いて戻って来い、後は俺がやる」

そついうと俺の周りにルナ達が帰ってきた

「これがお兄ちゃんの目的だったの？」

「いや、この次が本当の目的だ。俺が合図をしたら機体に取り付けて置いたワイヤーを全機体に繋げ。わかったか？」

「わかったよお兄ちゃん。」

話が伝わった事を確認すると俺はラウルが乗っているエクサランスのフレームからアージエント・ヘッドを引きずり出す

「悪いが一旦これで帰還しろ」

「すまない、助かった。それよりフィオナを!!」

「大丈夫だ、必ず助ける」

と言い終える前にフィオナが乗ったエクサランスが俺に攻撃を仕掛けてきた

「ごめんなさい、とまらないの」

「分かっている。ルナ、今だ。」

「わかったよ、みんな。ワイヤーをラグナレクに絡めて!」

「「「り、了解」」」

手足にワイヤーが絡み付く

「絶対に離すな、二度と会えなくなるかも知れないから」

俺は五連チェーングンでデユミナスを撃った、同時にエクサランスが暴走を始めた

「タイムタービンが……!? 出力が上がり続けてる!!」

「くそ、デユミナス!! 謀ったな!!」

「さら……ば……だ……」

俺はワイヤーを引っ張り家族の乗った機体を近くに寄せる、ちゃんとエクサランスも掴んでいる

「時空間転移!？」

ラージがそう呟いた瞬間に俺達は全員並行世界に飛ばされた
ただ、ラウル達よりも先に俺達＋フィオナは並行世界に着いていた

これが本当の物語の始まりである

始まりの出撃（後書き）

祝、閲覧数5000突破

作者としては物凄い嬉しいです。

ちなみにデュミナスとはあの気持ち悪いマシンです

ではこれからもよろしくお願いしますm（　）（　）m

漂流場所で……………（前書き）

投稿ペースを上げなければ（。；）

漂流場所で……

SIDE リヨウ

「あ、うん？いてえ、あたたた。つか無事に着いたか？」

周りを見渡すと、ちゃんと全機確認出来て一安心だ

それより今は時代と場所の確認の為にパソコンを……

「ラグナレク、ハッキングするからサポートよろしく」

「了解致しました、サポート開始」

えーと、アクセスポイントの確認……完了

データの読み込み開始……ブロックが以前の形式よりも劣化しているな、これなら前の応用で……よし、完了

コピーは出来ないから……うーん、よし。直接ラグナレクに転送、これなら危険はないな。よし、全工程完了。

原作の二年前か、多少はゆっくり出来るな。それよりみんなに通信しないとな

「おい、お前等起きろ。着いたぞ」

「う、うーん。気持ち悪いよーお兄ちゃん」><」

ルナは起きてるみたいだな、後の三人とフィオナはまだ気がつかないか

「ご苦労様、ルナ。一旦俺は隠れ家があるか捜して来るからここら一带にステルスを頼む」

「う、うん。了解したよお兄ちゃん」

「後でしっかりと休んで良いからな」

俺はそう言つと前の世界に隠れ家があつた場所に向かう

確か神様が言うにあれば一種の別次元だということ、つまり並行世界にも理論的には存在するはずだ

少年移動中

「着いたか」

「マスター、此処は……隠れ家ですか？」

「ああ、間違いない。」

そこにあつたのは世界から空間が切り離されている場所

「たぶんだが此処は俺達が家族又は友人と認めた奴にしか感知出来ない」

「？」

「悪い、わかりにくいか。え〜とだな、つまり此処の世界の主は俺
つて事だ…………一応な」

どうやらこの場所はまだ生きている、帰ってきたぞ我が家に。

「確認も済んだし戻るぞ」

「了解ですマスター」

少年移動中〜

俺が家族達のもとに戻ると、何故か子供たちとフィオナが話を
盛り上げていた

「お〜い、今帰ったぞ。何の話をしてたんだ？」

何故かみんな口を揃えて『秘密』と言われた、お兄ちゃんちょっと
ショックだよ

「まあ、それは置いといて。報告が二つある、良い事と悪い事どっ
ちから聞きたい？」

「じゃあ良い事からがいいな」

ルナが子供達を代表して言う、フィオナはと言うと黙ってこっちを
見ていた。

少し気になるなあ、よし。先に話でもしておくかな

「じゃあ報告は自己紹介の後にするかな。たぶんこいつらからはも

うされてるんだろ？」

「はい、良い子供たちですね」

「おいおい、そんなに堅くならないでくれよ。こつちまで堅苦しくなつちまう、俺はリヨウ、こいつらの家族だ。よろしくな」

「リヨウ？貴方は確かROK Iと………？」

「それは俺達のレジスタンス名のリーダーとしての名前だよ。俺はこの世界を………それはさておきフィオナは敬語禁止な、俺とたいていして歳変わんねーんだから。いいか？」

「うん、わかったわ。リヨウ、それで報告って？」

「やっと本題に入れたか………って言っても俺が話を代えたんだけどさ

「じゃあルナ達の希望通り良い事から話すから。一つ目は隠れ家がこの世界にも存在している事。もう一つは少しの間だけどゅっくり出来る事だ」

「ふーん。で、悪いことって何なんだよ？」

良い質問だよティード

「それはだな、並行世界に飛んだ事による記憶の弊害と俺が知る歴史から外れる事だ」

「ちなみに前者は俺には当て嵌まらない、後者は別にどうとでもなるから気になりはしていないが、子供たちとしては心配だろうな」

「ちょっとまって！リヨウ、貴方が知る歴史って一体なに？」

「仕方ないな、話してやるよ………と言いたいが今は隠れ家に帰る
としようか、家族たちよ」

この言い方かつこよくね？おい、ちょ、そこ石投げないで！？

そして隠れ家に到着した

「おい、ティード。家に帰ってきたならただいまだろ？」

「ちっ、ただいま……」

「おう、お帰り。さあ、今日はフィオナの歓迎会を開くぞ」

当の本人は全く状況を理解していなかった

「っ？？？」

「ルナとカンナはフィオナと着替えて来なさい、ティードとヴァンは俺んどこに来てくれ」

「「わかった（わ）よ」」

「了解した」

「……………うん」

そして今、オペレーションルームにて二人に詳しく今の状況を話している

「俺の目的はやつとスタート地点に着いた、今の成果はフィオナが死ななかった事。俺がもといた世界ではフィオナは死んだがこの世界では助ける事が出来た、二人ともありがとうな」

「ああ、それは分かったけどよ、何で俺達だけなんだ？ルナとカナ、後は本人に教えてやれよ」

相変わらず痛いところを突くな

「先に伝えておく事で多少なりとも混乱を防げるし、何よりお前ら二人の方が頭いいしな……………ははは……………はあ」

「悪かったよアニキ、まあ、それに関しては納得だけだよ」

「納得した」

此処で納得して貰わないと俺の計画に支障をきたすからなあ

気がつくど、どうやら結構な時間を話していたようだ

部屋に戻ると三人は私服に着替え終わっていた

「お兄ちゃん、これ似合ってるかな？」

ルナがくるくると回りながら（誤字にあらず）着ている服を見せるくいくいつ、いつの間にか隣にはカナナがいて袖を引っ張りながら聞いてきた

「可愛い？」

「うん、どっちも可愛いし似合ってるよ」

心からそう思いながら言ってる

俺（作者）はロリコン（です）じゃねえ！！

今、変な電波が流れた気がするけど話を進めよう。肝心のフィオナはノリについて行けずに「ぽけ」としている

「えーと、二人も椅子に座ってくれ。フィオナはそこに座ってくれ」

フィオナに赤い俺が使っていた椅子を渡す

「ありがとう」

「いやいや、それでだ。聞きたい事があるなら聞いてくれ、俺はそれに答える義務があるからな」

まあ、もとからこうする予定だったし。家族が増えたのは良い意味で計算外だったしな

「えーとじゃあ、あなたたちは誰？名前とかそういうのじゃなくてだよ」

「それに対する答えはだな、簡単に言えば歴史を知るもの。だけどそれは俺だけだ。こいつらは俺が拾っただけ、これでいいか？」

「うん、次は此処はどこなの？」

「此処は俺達の隠れ家兼基地、で、聞きたいと思われる方の答えは並行世界」

「並行世界？極めて近く、限りなく遠い世界のこと？」

ふむ、この世界での並行世界の概念はそれで決まりだな

「そうだよ、俺達は君が乗るエクサランスの暴走で此処に来たんだ。」

「えっ!？」

フィオナはショックを受けたのか俯く

「そんなに落ち込まれると心苦しいから先に言うけどさ、望んで俺達はこっちに来了。だからフィオナが落ち込む事はないよ」

「それでも私は……………」

仕方ない、フィオナにも俺の事を教えてやるかな

「仕方ない…………な。本来なら家族になってから教えていたんだけどな、特別に話してやるからちゃんと聞いてくれよ？これは全て俺が知る歴史だ」

フィオナは無言で頷くと顔を上げてくれた

「まず始めはフィオナ、君についてだが。本来なら君はアクセルか

らラウルを庇って死んでいた、これについては歴史を知る第三者が介入して解決出来た。次に俺の事だけど、俺は転生者。俺は生前はこの世界を観測する場所にいた存在だ、信じられないと思われるがすべて真実だ」

「私は……死んでいた？ 転生者？ 観測する者？ 意味がわからないわ……………」

「証拠を見せると言われても今は見せてあげられない、契約するか？」

「契約？」

「ああ、俺達の新しい家族になるという契約だ」

契約と言うには曖昧過ぎて信用性にかけるが俺はこれを望んでいた

「ええ、わかったわ。私はあなたたちと家族になる。よろしくね、みんな」

こうして時空間転移をした日は何とか終わりを迎えた

「ああ、こちらこそ。そしてようこそ、我が家に」

日常？（前書き）

閑話です、つまらないと思いますが読んでやって下さい

日常？

俺の一日について今回は説明しよう、だいたいの日常では今から説明をする様な生活を送っている

朝

俺の朝は早い、なぜなら

「お兄ちゃ……うにやうにや、むにゅ」

トガツ、俺の頭があつた場所にルナの踵が落ちていた

「うごっ！？あ、あぶねえ……………またルナは俺のベットの転がって来たのか。しかも服がはだけてるし」

危険を感じ紙一重でルナの踵をほぼ毎日避けている。それと同じように毎回ルナの服をちゃんと戻したり布団をかけ直したりもしている。

「うん、もう朝か。さて、朝ごはん作らないとな」

最近は台所に向かうと人に会うようになっていた

「ん、おはようリョウ」

「うん、おはようフィオナ。朝は俺が作るって言ったんだけどなあ……俺の料理ってそんなにまずいかなあ？」

最近はいつも俺が作ると言っているのになあ

「ち、違うよ。そうじゃなくて……そう、私は朝早いからちょっと暇なの／＼／＼／＼」

「ん、そうなのか。よかった。あとフィオナ、顔が赤いぞ？風邪でも引いたのか」

「そんなことないよ！！それより早く朝ごはんつくろっ、ね？」

「じゃあ作ろうか、リクエストはある？」

献立決めるのって結構面倒なんだよね

「じゃ、私は洋風が良いわ」

「わかった、じゃあパンとサラダと紅茶で良いかな。フィオナはテーブル拭いてくれないか？あと時間になったら子供達を起こしてくれな」

「うん、了解」

フィオナはそう言うとテーブル拭きをもって部屋を移動した

少年料理中

「お、みんな起きたのか。ほら顔洗って来なさい」

「…………はい…………」

頭をこくこくと揺らしながら眠そうに洗面所に向かった四人を見ながら作った料理をテーブルに運ぶ

「ありがとフィオナ、俺一人だと結構大変だったんだよ」

「いえ、大丈夫。私子供好きだから」

そんな会話をしていると顔を洗い終わった子供達が戻って来ていた

「お兄ちゃん、なんか楽しそうだね」

「ん、そうか？アニキはいつもあんな感じじゃないか」

ルナとティードは何かを話しながら席につく

「……（こくこく）」

「おはよう兄ちゃん、フィオナさん」

カンナとヴァンはいつもどおりだ、しかしだな

「カンナ、もう少し会話をするのを慣れような、ヴァンもだぞ」

そう言っただけで俺はカンナとヴァンの頭を撫でる

「うう、カンナとヴァンばかりずるいよ」

「まあ、ルナはしっかりしてるから助かってるんだけどなあ。やっぱりティードだけか」

ティードに助けを求めて視線を送るが……

「あん？俺は飯食うのに忙しいんだ、自分で何とかしてくれアニキ」

「あ、ティード。ドレッシング取ってくれる？」

ああ、フィオナまで……………

「まあ、早く朝ごはんべような」

「うん、いただきます」

「……（こくり）」

「いただきます」

こうして忙しい朝は終わる

お昼

昼までの間はほぼ研究室に籠っている、今はエクサランスのパーツを設計している

「フェアリーを地上でも使えるようにするにはエネルギーの変換と重力緩和のシステムが必要になるな」

既にラグナレクの整備が終わり、追加装甲をナイトメアに取り付け、残るケルベロスとフェンリルはパーツの開発中で戦力的には何も問題は無いのでエクサランスの改造に勤めている訳だ

「いや、フェアリーにジャマーシステムを付けての攻撃もいいな。

よし、再現開始」

俺は紙とペンを取る、ここで神様から貰った能力『技能模倣』を使う

『技能模倣』は俺の知る知識の中の人物の能力を自分の物として扱う事が出来る。ここで模倣した人物は某魔法先生の生徒のバルと呼ばれる少女

時間にして約一分で設計図は完成した

「後は理論と理屈を固めないとな。先にパソコンにスキャンしないとな」

カタカタカタカタカタ

「スキャン完了、次は更に設計図の穴を埋めないとな」

引き出しから一つのUSBメモリを取り出す

『開発用ナノマシン・武器設計専用』

「見取り図の立体化開始、理論と理屈の補強、高層理論を再現」

『終了まで後一時間です』

ここからはナノマシンが勝手に終わらせてくれるから暇になるな

「訓練でもするかな……………」

少年移動中

訓練室のランプが使用中になっていた

「こんな時間に誰だろ？」

扉を開けた先にはティーダが刀を振っている姿があった

「ふう、何だアニキか。ここ使うのか？」

「ああ、ちょっと鍛練でもしようかな」

俺も壁に掛かった愛刀を手を取った

「アニキそれは？」

「これか？これは俺の愛刀の獅子刀・傀儡だ。シットウ・カイライその辺の兵器よりよっぽど良く切れるな」

鞘から獅子刀・傀儡を抜く

俺のスタイルは居合からの神速、模倣を使わないでF a t eのアサシンを完璧に超した

「アニキ、俺と手合わせしてくれ！！」

ティーダが手を合わせて俺に頼んできた

「仕方ないな…………一本だけだぞ」

「おうつ！！」

試合をするために真っ直ぐに向き合う

「行くぜ！」

ティードは下段に刀を構えて走ってくる

「ううつりやあああ！！！」

首を撥ねるコースにやや斜め下から切り掛かってきた

「隙が大きいな……流れ柳」

それを力を一切かけずに刃を滑らせて流す

「終わりだ……枝垂れ桜！」

鞘から一気に抜き放ち首の前で止める

「ま、負けた……くそつ、アニキ強すぎだ」

「お前も筋が良いからすぐに強くなれるさ、じゃあ俺は戻るから」

「ああ、わかった。じゃあなアニキ」

こうして昼は終わり夜がくる

夜

「……（くいくい）」

夜になるとカンナの活動が活発になる

「あそぼ？」

「何で疑問形なんだ？」

「忙しいと迷惑かけるもん」

ああ、気を使ってるのか。いい子だなあ

「いいよ、今は暇だから何して遊ぼうか？」

「一緒に本読むの」

俺に『北欧神話』と書かれた一冊の本を渡して来た

「北欧神話か、これだったら聞いてくれたら俺が教えてあげたのにな」

小さく俺は笑ってカンナに言う

「じゃありヨウお兄ちゃんに話して欲しいな」

「うん、いいよ何から聞きたい？」

カンナはてくてくと歩いて俺の足の上に座った

「じゃあフェンリルについて教えて」

俺はカンナの頭をよしよしと撫でながら話を始めた

「フェンリルってのは邪神ロキと巨人族のアングルボダから生まれた三匹の魔物のうちの一匹なんだ」

「うん、それで？」

「そのフェンリルは上顎は天に届くほど大きな口を持つ巨大な狼でどんな鎖にも縛られなかったんだ、けど大神オーディンは小人族に頼んで世界に無いもので鎖を作って貰ったんだ」

「世界に無いもの？」

「ああ、それは山の根、女の髭、鳥の唾液、猫の足音、魚の息で作った魔法の紐グレイプニルでフェンリルは拘束されたんだ」

「その後はどうなったの？」

この娘は優しいから自分達に当て嵌めてしまってるんだろうな

「大丈夫、話しには続きがあるから。フェンリルはその後しばらく岩に繋がれていたけどラグナロクの時に解放されて自由になりました。これでフェンリルのお話は終わり」

カンナはニコニコとしながら俺に言った

「お兄ちゃんが私達を助けてくれたみたいだね」

だけど俺はそれに上手く答える事は出来なかった

「俺はたださ……いや、なんでもない。カンナ、もう遅いから寝

「ようか？」

「うん」

俺はそのままカンナを抱き上げ部屋に連れていった

「お休み、カンナ」

「うん」

カンナが寝付くのを待つて俺は部屋を出た

「さて、俺も寝る……かな!？」

俺の視界に裸のフィオナが映った

「あっ!! / / / / /」

「わ、悪い。てか、何で裸で歩いてるんだ!？」

「ち、違う! 下着を忘れて服を持つてくるのわすれて / / / / /」

フィオナは真っ赤になり俺を見ている

「く、仕方ない。俺の服貸してやるから早く着ろ」

俺は上着を脱いでフィオナに渡す

「あ、ありがと / / / / /」

「次からは気をつけてくれよ」

俺は逃げるようにそこを立ち去った

「リヨウに裸見られちゃった／＼／＼／」

その日フィオナはベッドの中で悶絶していたようだった

自室

やばい、フィオナが異常に可愛い。あんなキャラだったわけ？

「んん？お兄ちゃんどうしたの？」

「る、ルナ。なんでもないから」

やべ、すげえどもってる

「ふん、まあいいか。お休み、お兄ちゃん」

「あ、ああ。お休み、ルナ」

ルナが寝たのを見てパソコンで完成した設計図を見ようとしたが

「ふあゝ、ねみい。ねよ」

俺は電源をきってベットに入った。

「今日も忙しい一日だったなあ」

日常は結構面白い、ヴァン少年はどこかで呟いていた

時として選択は運命を劇的に変える（前書き）

やっと更新出来ましたが短いです

時として選択は運命を劇的に変える

あの日常生活はあっという間に終わってしまった。

楽しい時間が多かったぶんそれに比例して開発や訓練も真面目になしてきた

「俺達はこれからDCの残党の殲滅を開始する。フォーメーションはヴァルハラだ」

この一年はいわばこれから始まる激戦に備えての休暇であった

今から過酷な戦争に出向く、整備は各々で行っているので問題は無い

そしてフィオナのエクサランスのフレームを完璧に仕上げフェアリも地上で使える様になった

「しばらくはここに帰って来ないから必要な物をちゃんと考えてこい。これで神々の黄昏のミーティングラグナロクを終わる」

「「「「了解」「」「」

「わかったわ」

「それじゃ各自準備が終わりしだい格納庫に集合な」

最後はいつもの様にいい解散した

「じゃあ俺はこのままラグナレクに乗るかな」

俺は最初からラグナレクに必要なモノを積んでいる為に準備は必要無い

「うえ、うゝ、ぐすつ、お兄ちゃんゝ!!」

ルナが涙目でぐずりながら俺の服の袖を引っ張る

「おつ、とと、どうしたんだルナ？」

「私の革手袋がないのぉ」

おお、そりゃ大変だ。ルナはあれが無いと操縦テクが少し落ちるからな

「仕方ないなあ、俺のスペアでいいなら貸してあげるから」

「うう、うん。ぐすつ、ありがとうお兄ちゃん。ひっく、うう」

こりゃ新しいの買いに行くしかないな

ルナにスペアの革手袋を渡してラグナレクに戻ろうとすると今度はカンナとティードが来た

「兄貴、一応対人用武器は持った方がいいのか？」

「あと……食べ物とかはどうすればいいの？」

あ、言い忘れてた

「えゝと、ティードとカンナの質問だけど。最低限に自分を守る為の武器は持つように、食料は心配しなくても大丈夫だよ。ティード

は武器について他のみんなに伝えといてくれ」

「わかった、りょーかい」

「うん、わかった」

今度は入れ違いでヴァンとフィオナが来た

「兄さん、フィオナのエクサランスについて何ですが、少し弄っても大丈夫ですか？」

「ん、エクサランスに何か問題でもあったのか？」

「いや、私には少し反動がきつくてね。ヴァンに重力緩和のシステムを弄ってもらいたいんだ」

フィオナが追って説明をする

「ああ、別に構わないよ。あとヴァン、ヘイムダルの方は大丈夫か？」

「特に問題はないですよ、では少し行ってきますね」

そうして待つこと一時間、やっと全ての準備が完了した

「それじゃ行くぞ！！N o ・0ラグナレク出る」

「わかったよN o ・1ナイトメア出るよ！」

「わかった……N o ・2フェンリル出ます」

「No.3 ケルベロス、了解だぜ」

「No.4 ヘイムダル、了解です」

「エクサランス、大丈夫行けるよ！」

そして俺達はDCの殲滅に向かった

今の俺達は相手には見えていない。いや、正確にはレーダーに反応していない

「ルナ以外はステルスモードをアウト、これより殲滅を開始する」

「了解」

そして戦場に俺達『神々の黄昏』のこちらの世界で初めての歴史への介入が始まった

陣形はヴァルハラ、形としては俺が敵陣に突っ込み近距離からの殲滅

そして、ステルスを巧みに使って敵陣の後ろからルナのナイトメアが

横っ腹をヴァンのヘイムダルが強襲してルナと二人で十字放火が敵を殲滅する

そして逃げようとする敵をティーダがケルベロスで殲滅

ファイオナのエクサランスは地上で使える様になったフェアリーで援護射撃

おおよそ80近くいた敵機をコックピットに傷をつけない様に無力化していく

これは最早殲滅ではなく蹂躪、この世には本来有り得ない技術は脅威ではなく恐怖

使い方を一歩間違えるだけで一瞬で相手を蒸発させる兵器

「よし、これで今日は終わりだ。戻るぞ」

実際は敵基地に着くまで300以上の機体を無力化してきた。日にちにして約一週間、俺達は精神を擦り減らしながら戦った

「兄貴は何で破壊させないでコックピットを残させるんだ？」

ティーダが不思議そうに聞いてきた

「お前達に人殺しになるのは早い……………まあ、命を軽く見ないで欲しいだけだ」

「お兄ちゃん……………嘘ついてない？」

今度はカンナが

「ああ、嘘じゃない」

「……………そう」

「でも遅かれ早かれ死には慣れないといけない。それをただ少し遅くしているだけだよ、宇宙^{ソラ}に行けばこの数なんて比にならないくらいだしな」

「でも大丈夫だよお兄ちゃん、家族が私達にはいるもん」

「そうだなルナ、ヴァンは……特に無いようだな」

「うん」

「リヨウも信用されてるのね」

フィオナが小さく呟いたが俺には聞こえてはいなかった

そうして一週間に渡る俺達の殲滅戦は成功に終わったのだった

突然過ぎる出会い（前書き）

久しぶりの投稿で内容がめちゃくちゃですが飽きずに読んでいただければ嬉しいです

突然過ぎる出会い

俺達は殲滅を終えて隠れ家に帰る途中だった

「お兄ちゃん、何か反応があるよ？」

と、ルナが俺に言ってきた

「まだ、残って……違う、テスラ研だ」

「テスラ研って兄貴の目的地の一つじゃなかったか？」

「ああ、仕方ない。今からテスラ研に向かう」

「はあ、またなんでですか？」

と、ヴァンが聞いてくる

「困ってる奴らを見逃す訳には行かないだろ？」

つてのは建前で、実際連邦の奴らに恩を売っておくのも悪くないかな

「リヨウが黒い……」

「気にしたらダメですよ、お兄ちゃんはどんな感じになってもお兄ちゃんですから」

カンナ、多分説明になってないよ、それ

「まあ、冗談はさておき本音を言っとだな。俺の計画の為だ」

「それが一番わかりやすいね」

「そうだな、それだったら俺達は兄貴についてくしか無いし」

「ティード、それじゃお兄ちゃんが無理矢理私たちを使ってるみたいじゃないの？」

「ああ、悪い。そういう意味じゃないんだよカンナ」

「まあ、いつもの事だからそろそろ行こうか」

と、声をかけると

「「「「「了解」「」「」」」」」

「これから俺達は本格的に歴史を変える！！ついて来てくれ」

俺達はテスラ研に向かって移動を始めた

「ロレンツオ中佐、ランカスター隊が全滅しました」

所属不明の兵が告げる

「何……？敵は三機だったはずだ。倍以上の数を回してその結果か？」

ロレンツォと呼ばれる男は今だ疑った様に聞く

「は、はい。これが敵機の映像です」

モニターに映像が流れた

「ヒュッケバイン……それに、ゲシュペンストのカスタム機が二体。一機はデータと色が違うようだが……ATXチームだろうな、これは」

モニターを見て納得したように言う

「や、やはり」

「場所が場所だ、予測はしていた。奴を呼んでおいて正解だったな」

「……………」

「……人質は？」

「所定の位置へ移動済みです」

「タイプCF起動までの時間は？」

「あと20分ほどです」

「広範囲ASRSの取り付け作業はどうか？」

「起動までには間に合うそうです」

「上手く使えるのだろうな？」

そこからもしばらく会話は続き

「了解した。ムラタを呼び出せ」

「はっ」

兵が通信をとる

「何だ、中佐？」

「ランカスター隊が全滅した。敵はATXチーム……お前向けの相手だ」

ムラタと呼ばれる男は興味深そうに呟く

「ほう」

そしてそこにATXチームが着いたようだ

「動かんか。何かを待っている様にも見えるが気に入らん」

「確かにね。余裕しゃきしゃきって感じよねえ。逃走ルートはもう確保済み……とか？」

「クス八達の件もある。どの道、俺達も下手に動けん。その場で待機。油断するなよ？」

「了解、せめて状況がわかればねえ」

「ん？あれは……カメラ望遠」

ブリットが何かを見つけたした

「く、クスハ！クスハがあそこにいます！！」

「へ！？そんなに都合良く！？」

エクセレンが驚きながら返事を返す

「座標転送します」

「……………、キョウスケく、クスハちゃん達の状況確認く！」

エクセレンが少しふざけて言うと

「……見ればわかる。人質にされているらしいな」

と、冷静に返された

しかし、ブリットはクスハが捕まっている事もあり冷静では居られなかった

「今なら人質と反抗グループを分断出来ます！」

「ちょい、ブリット君待って！」

「こういう状況を打開する為に来たんでしょう、自分達はっ！！」

といってブリットは一人突っ込んで行く

「突貫して来たか」

敵のムラタは状況を冷静に判断している

「！、あのガーリオンの剣は……………シシオウブレードか！？」

見覚えのある剣にブリットは動揺する

「俺が相手してやる」

「くっ、そこをどけええええ！！」

ブリットは叫びながらツツコミチャクラムで襲い掛かる

しかし

「青二才が、隙だらけだ。もらった！！」

「ぐわあああ！！」

一線を喰らってしまった

「ぶ、ブリット君！！」

エクセレンが心配をして声をかけると

「ふん。ATXチーム…………あのゼンガー・ゾンボルトに鍛えられた

連中だと聞いていたのだがな……………な、新しい反応だ?」

その声が聞こえた途端に静寂に包まれた

「我等は神々の黄昏、ラグラクだ。今すぐどちらも武装解除してもらつ」

「誰だ!!」

今まで冷静を保ってきたキョウスケだったがさすがに焦っているようだ

「神々の黄昏だと? ふん、あの噂の謎の組織か」

どうやらムラタは何かを知っているようだ

「我々の噂を知ってなお挑むか、そちらは知らないようだから今回はそちらに着くでしょう」

その宣言と同時に五機の機体が姿を現した

「ステルス!？」

「そう、警戒するな。今回は味方になると言っただろ?」

SIDE 神々の黄昏

「そう、警戒するな。今回は味方になると言っただろ?」

俺はまだカラーを赤に戻していないアルトアイゼンに乗ったキョウ

スケに言う

「信用出来んな、何故俺達に協力する？」

「こちらにも事情があるんだ、それに勘違いとはいえ来てしまった以上は手伝い位はしよう」

そう、テスラ研で何かが起きたと思い、来たら全然違う場所で戦いが起きていたのだ

しかし、結果は問題なかった。キョウスケ達に恩を売るという目的はどうやら達成出来そうだ

「それと、信用できないならしなくてもいい。ただのボランティアなんだから。ナイトメア、周りのガーリオンを落とせ」

「了解、ナイトメア行くよ」

「なつ、迂闊に行けばブリットの二の舞に！？」

ナイトメアはいきなり姿を消しレーダーに反応を消した

そして、一瞬で周りを飛んでいたガーリオンが爆砕した

「任務完了、戻るね」

「ついでに人質も確保して来てくれ」

「了解」

「なんて機体だ」

「私のヴァイスちゃんより速い!？」

「どうだ、まだやるか？」

俺はムラタの機体に話しかける

「噂に違わぬ強さ、今回は分が悪い様だ」

「じゃあ退いてくれるのか？」

「ふん、逃げなど戦い終わってからで十分だ」

「そうか、悪いがこれが俺のやり方なんでね。恨むなら恨んでくれてもかまわない」

ラグナレクで一気に詰め寄り反撃の時間を与えないまま一瞬で腕を刎ね落とす

「いつの間に!!」

「これで終わりだ」

コックピットを残して破壊しようとしたとき研究所からタイプCF・ヴァルシオン改が出てきた

「まで、それ以上のことをするならこちらも人質を殺すことになる」

「くっ、ロレンツォ中佐か。条件を出せ」

「こちらは後逃げるだけだ、よってこの場から逃げさせてくれ」

「分かった、その代わり人質を一人でも殺そうモノならば我々が始末する。」

「了解した」

俺たちは何とか始まりの出会いを終えたのだった

突然過ぎる出会い（後書き）

すいませんでした。長い間書けずにいたのですが今回も内容が意味が分からない方も多い気がしてなりません

次回はもすこしがんばって書きたいです

意味（前書き）

本編からまた少し離れました

意味

「帰るぞ、ステルスモードに移行しておけ」

何事も無かったかのように俺は家族（仲間）に告げる

「まて!!」

その声に俺は言葉を返すことはしなかった

「何故俺たちを助けた!!」

「誰かを助けることに理由は要らないだろ？」

口が勝手に動いてしまったがそのままラグナレクをステルスモードに移行しその場を後にした

「なあ、アニキ？」

「なんだ、ティード。何かあったか？」

ATXチームから離れた所で通信が入った

「アニキは誰かを助けるのに理由はいらないって言ったよな？」

「そうだったか？まあ、そういう話は家に帰ってからしようか」

「あ、ああ。わかったよアニキ」

少年少女移動中

隠れ家に帰ってきて早速結果を報告、そして今に至る

「それで今回の作戦の結果だが、上出来だな。本当ならまたすぐに活動する予定だったがしばらくは身を隠すため単独任務が増えるからみんなはしばらくお休みだ。以上、これでミーティング終わり。」

ミーティングが終わりそれぞれが自分の部屋に戻る中俺とティードだけはそのまま残っていた

「アニキ、いいか？」

「別にいいよ、それでティードは何が聞きたいんだ？」

「アニキのあの言葉ってよ、俺たちにとってはさ、本当に嬉しかったんだ。それでさ、なんとなくだけどよお礼が言いたくなってるさ。本当にありがとうアニキ、俺たちを助けた上に家族として迎えてくれたこと」

その言葉を聞いて俺は再び固く誓うのだった。絶対に家族は守りきって見せると

「そうか？俺にとっちゃ当たり前すぎることなんだけどな。それに勘違いすんなよ。俺は初めからお前らの家族じゃないか」

「はは、そうだよな。アニキ、これからも俺はアニキについていくから置いてかないでくれよ?」

「当たり前だ、おいてくなんて絶対ない。お前らが追いつくまで俺は待つからさ」

そういうとティードはバツが悪そうに頭をかいて

「ちょっと訓練してくる」

と言って走っていった。さあ、俺も部屋に戻ろうかな

部屋に戻るとルナとカンナが俺に抱きついてきた

「まで!?いきなりどうした???つかルナは分かるけどカンナまでどうしたんだ!?!」

「うっ、お兄ちゃん私のことそんな風に思ってたんだ!!」

「……………疲れた」

ルナは抱きついたまま俺をぽかぽかと叩き、カンナはそのまま寝てしまった

「ははは、冗談だ。痛いからやめてくれよ」

「眠ったカンナを抱き上げそのままベットまで歩く

「あ、カンナばかりずるいよ。ルナも抱っこして」

そういつてルナも俺の胸にダイブしてきた

「うお！！危ないだろ？ちゃんとルナにもしてやるってのにさ」

「えへへ」

そんな顔を見ていると不思議と怒る気はしなくなった

「はいはい、じゃあ少しだぞ？」

「うん」

二人を抱きなおしてベットまで運んだ

「ねえ、お兄ちゃん？」

「なんだ？他に何かあるのかい」

「ううん、ただね。ありがとって言いたくてね」

今日は何か目から汗が出そうになるな。こんなことなら家族には危険なことをさせなければよかったと思った。けど、これは家族の総意だったから仕方なかったんだけどさ

「そうか？俺はその言葉だけで嬉しいよ」

「うん、お休みお兄ちゃん」

「ああ、お休みルナ」

二人がベットで寝ているのを少し見てからキッチンに向かうとヴァンとフィオナが料理をしていた。ヴァンって料理できたっけか？

「あ、リヨウ兄さん」

「リヨウどうしたの？」

どうしたも何もそこは俺がいつも料理をしている所じゃなかったかな？

「ちょっと料理をしに来ただけだよ」

「ああ、ちょっと待っててね。すぐに終わるから」

「手伝おうか？」

「いいえ、リヨウ兄さんは座っててください」

そういつて俺をヴァンが椅子に座らせた

「今日は何もしないで座ってても僕達が家事をしますから大丈夫です。」

「そうよ、リヨウは休んでもいいよ」

いや、逆に何もしないとき。何か申し訳なくてさ

「それじゃなくてもリヨウ兄さんは僕たち以外にも背負っているモノが多いんですから」

そうか、俺も鈍いなあ。こいつらは俺を心配してんのか

「ああ、わかったよ。今日は大人しくしてるよ」

「そうね、最近は一人で何でもしようとしてるの見てたけど結構心配だったのよ」

「そりゃ悪いな、フィオナ。もう少し身体も気を使うとするよ」

そういつて会話を終えるとヴァンが料理を持ってきた

「出来ました、リョウ兄さんの料理には劣るかも知れませんがなかなかの出来ですよ」

出された料理は洋食。フレンチトーストに生クリーム、コーンスープにサラダ。組み合わせはさほどよくはないが味は良かった

「美味しかったよ」

ただ一言、心から思ったことを述べた

二人は食器をキッチンに満足げに運んで行った

俺は椅子から立ち上がりオペレーション室に向かう。目的はこれからの予定を決めるために

パソコンのスイッチを押して起動を開始する

パスワードは初期設定から変えて、すぐに打ち込めるモノにした

「さあ、俺の知る限りはこれからが大変になるんだよなあ」

そう言いながらも目的を果たすために指を動かす

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
カタ

画面に映る情報を頭でまとめて資料を作成する

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

そこに出来上がったのは一つの資料本、内容は今までの連邦の裏側
つまり、隠蔽されてきた真実。これは俺達の最終兵器だ、血を流さ
ないで平和に物事を進展させるための

「だいたいこんなもんだよなあ」

腕を組み頭の上上げて身体を伸ばす

背骨が心地よくポキポキとなった

「家族だけは守る、この力はそのために貰ったって事かなあ」

あの時はただ楽しそうだったから

今は違う。実際に触れ、感じ、愛し、感情がこの世界で生まれた。
だからこの力は大切な家族を守る為に使う

例え俺が死ぬことになっても

「さあ、仕事も終わったし寝るかな？」

まあ、俺が死んだら悲しんでくれるよな？

今はその時が来るまで『今』を楽しむとするかな

この限りある『有限』である時間をさ

閑話ゝ家族との買い物（前書き）

再びオリジナルストーリーへと戻ってしまいました。

なかなかゲームを進める時間がなく、オリジナルストーリーが続き
そうですので、本編は12月の冬休みからに進める予定ですので理
解いただきたいです

閑話ゝ家族との買い物

あの突然なる出会いから数日が過ぎ、家族で平和に過ごしていたら隠れ家の冷蔵庫は底を尽きかけていた

「朝ご飯の分はぎりぎり残ってるけど昼は無理ですね。どうしますか兄さん？」

ヴァンが少し悩みながら俺に聞いてきた

「あゝ、じゃあさ。今日はみんなで買い物に行こうか。ちょうどいい機会だしさ」

そうだ、たまには戦いなんて忘れて遊ばないとだめだよな

「いい機会ですか、わかりました。僕はティーダとフィオナに伝えてきますから兄さんはルナとカンナに教えておいてください」

「じゃあ、10時迄には着替えて生活区のロビーに集合な」

「わかりました、それでは伝えてきますね」

そう言つてヴァンは冷蔵庫を閉じてフィオナとティーダを呼びにいった。

さて俺もルナとカンナに教えに行く為にルナのいる自室に向かった。扉を開けて中に入るといつもの如く毛布やら服やらがはだけた状態で寝ているルナがいまだに眠っていた

「おーい、ルナ起きてるか？」

ぷにぷにとほっぺをつつきながらルナに聞くと

「ふにゃあ？すーすー」

と、気持ちよさそうに寝ているのがわかった。この様子だとまだ起きそうにないなあ、先にカンナから教えるか

俺ははだけたいろいろなものを元に戻しカンナの部屋に向かった

カンナの部屋の扉を開けるとベットの周りに散らかった本が目に入った

「はあ、また本を読んでそのまま寝たのか」

俺は呟きながらも本を拾い本棚に戻していく、その合間にカンナの顔を見たりしていたら

（やっぱり子供ってかわいいよなあ。今の俺は限りなく幸福だよ）

なんて思っていた。最後の本を棚に入れてルナ同様ほっぺをぷにぷにとつつきながら

「カンナ、起きてるか？」

「すーすー…………ふにゅ？お兄ちゃん？」

「お、起きたか。今日は家族みんなで買い物に行くから十時までに生活区のロビーに集合な。って、また寝てる！？」

「むにゅ、お兄ちゃん」

まだ寝ぼけているのかカンナは俺の腕に抱きつきながらうつうつとしていた

「はは、しかたないなあ。カンナ、朝だぞ」

ぺちぺちとほつぺを軽く叩くとカンナが完全に起きたようだ

「あ、お兄ちゃん……ふあ、おはよう」

「ああ、おはようカンナ。さっきの話覚えてるかい？」

「え、お兄ちゃん私に何か言っていましたか？」

やっぱり寝てたのかあ。まあ、カンナの寝起きも見れたしいいかな

「うん、今日は家族みんなで買い物に行くから生活区のロビーに集合って教えにきたんだ」

「買い物……お兄ちゃんちょっとまってて、今着替えるから」

そういうとカンナはクローゼットから私服を取り出して着替え始めた

「カンナ、俺は家族だからいいけどさ」

「？」

どうしたのかという顔でこっちを見てとまってくれた

「他の人がいるときはちゃんと出てもらってから着替えるんだよ」

「わかってますよ?」

「だったらいいけど、これからは俺も出てから着替えてな」

「?」

流石に年下の女の子、しかも家族とは言え裸を見ると照れてしまうからなあ。頼むから不思議そうに見ないでカンナ!!

そんなこんなで着替え終わったカンナと再び自室に戻ってきていた

「ところでお兄ちゃん?」

「ん?」

「何時に集合するんですか?」

「大丈夫、まだまだ時間はあるから」

いまだに起きる気配のないルナを見てカンナがベットに近づいて何かを呟いた

「は……く……ないと……さん……るよ?」

「へにゃ!?!」

あ、すごい勢いで起きたなあ。なんていったんだろう?

「おはよう、ルナ。って、何で涙目なんだ!？」

「ルナこれから早く起きるから!！」

「ルナ、それじゃ主語が抜けてて言葉が通じないよ？」

「う、ううゝ!！」

と、こんなやり取りの後にしっかりと今日の予定を話してから俺だけ部屋を出た。だってさ、カンナといいルナといい俺がいるのに平気で着替えようとするんだもん

俺ってもしかしてお父さんの位置に考えられてるのかなあ?でも、俺ってそんなに老けてるか?一応大学生くらいの歳なんだけどもなあ

「お兄ちゃんそんなところでなに考えてるの?」

「悩み事?」

いつの間にか着替え終わって部屋から出てきたルナとカンナに心配そうに聞かれた

「ん?いや、何でもないよ。じゃあ行こうか」

「うん」

「はい」

生活区ロビーには集合三十分前というのにティーダ、ヴァン、フィオナが楽しそうに会話をしながら待っていた

「お、アニキ早いじゃん。ルナとカンナも一緒って事は起こすのに時間でもかかったのか？」

「まだ三十分前ですよ兄さん？」

「リヨウおはよう、ってみんな早いね」

なんだかんだ言っても俺たち家族はみんなの時間を大切にしてくれてるんだよなあ

「うう、ルナも今度からは早くおきるもん」

「ティード、私はルナより早く起きた。遅れたのは私のせいじゃないよ」

「ううう、カンナちゃんが苛めるよお兄ちゃん」

ルナは涙目で俺に抱きついてきた

「まあ、ルナも時間前には起きれたんだしそんなに言わなくても大丈夫だろ？」

「兄貴、ルナには結構甘いよなあ？」

「そうか？俺はみんなに優しくしてるつもりだぜ？」

「む、そういう意味じゃねーんだけどなあ」

ティードはぶつぶつと呟きながらヴァンと話をしていた。俺何か間違ってたか？

「兄さん、気にしなくても大丈夫ですよ」

と、ヴァンの声が聞こえたので気にしないことにした

「それで買い物ってどこに行くつもりなの？」

「フィオナはどこか行きたい場所とか希望はあるか？」

「私はどこでもいいわよ」

ふむ、どこでもいいと来たか。じゃあ適当にデパートとか周るかなあ

「じゃあ適当に街をみんなであらつくか？」

「俺はそれでいいぜ」

「僕もそれでかまわないです」

「ルナもそれでいいよ」

「私も」

「いいんじゃない、それで」

との事なので俺たちは街をぶらつくことに決めた。移動手段確保のために前に買った車を車庫から引っ張り出してみんなを乗せた。このときルナとカンナのどっちが助手席に乗るのか壮絶な口論の後、結果じゃんけんでカンナが勝利しルナがぶーたれていた

「ふふ、お兄ちゃんの隣の席です」

「は、はは。帰りはルナと交換してやれよ？」

「はい、ちゃんと交換します」

後ろの席からはルナの機嫌を直すのにティードとフィオナが苦労していたのは言うまでもない。ヴァンはうまいこと一番後ろの席でドライブを楽しんでいた

はじめに来たのは某洋服店。ここでみんなの私服を買っている。俺はライダーズジャケットやチェックのパーカー、ジーンパンなどを今回は買い足した。

ティードは髑髏が描かれている服を基本に買っていた、ヴァンはあまり興味がないらしく機能面の充実している上着やズボンを買っていた

ルナはいつの間にか皮手袋を買っていた。まで、洋服店に皮手袋って売ってるものなのか？

カンナはフィオナと一緒にいろいろと女の子らしい服を買っていた、フィオナはどちらかというと男の娘？って感じかな

次に来たのは電子機器専門店、ここに来た理由はヴァンが何かを買いたくて来たらしい

「なあ、何を買った？」

「外付けのハードと書き込み用のウェアです」

「今家にあるやつじゃだめなのか？」

「秘密ですよ」

此処での買い物が終わるとちょうど昼時になっていたのもそのまま近場にあったレストランに入った

そこで某パイロット兼コック・テ カワアキ に似た人に出会った。
というか本人？

そんな感じで啞然としていたらみんなに心配されたのは言うまでもない。後で名前を聞いたら同姓同名でしかもコック見習いだそうだ

「好きなもの頼んで食べていいよ」

これが失敗だったのかも知れない。俺たち男組みは以外に食べる量が決まっっていてそんなに時間はかからなかったが女性人は違った。会話を楽しみながらスイーツという名の食品を口に入れてはさらに注文しを繰り返して二時間ばかりそこで食事を楽しんでいた

その後はそこから歩いて食品専門のスーパーに向かっていた

「お兄ちゃん！！早く」

先をトテトテと走りながらルナがこっちを見て手を振っていた

「おい、そんなに走ると危ないぞルナ」

「えへへ〜だいじょうぶ!？」

言わんこつちやない。たちの悪そうな男二人にぶつかりルナは泣き
そうな顔になっていた

「おい、お嬢ちゃん。痛いやないか」

「兄貴、どうしますかこのガキ？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

仕方ないなあ、早く助けてあげないとだめだなあ。そう思つて前に
出てルナを助けようとしたときに気に入らない言葉が聞こえた

「このガキ拉致つてどこかに売り飛ばしちまいませんか？」

「確かによく見ればガキやけどいい顔しとるな。高く売れるんやな
いか。嬢ちゃんこつちきいや」

「ひ、い、イヤッ」

このとき、俺の理性は何か得たいの知れない何かに蝕まれていた

「なんや、兄ちゃん？なんか文句でもあるんか」

「正義ぶってるんじゃないぞコラッ！！」

「お前ら……し……た……か？」

「う、うつつ、お兄ちゃん？」

ルナが泣きやんでこっちを見ていた。けどもう止まれそうにない

「なんだ、ブルって声も出ねーのかぁ、アア!!」

「おい、やめとき。一般人にてえ出したらめんどくさ……い!？」

「あ、兄貴!？てめえ、何しやがった!!」

腕をつかみそのまま投げ飛ばしただけだ、そう驚くこともないだろ

「お、おい。アニキ、それ以上は人間としてやっちゃ駄目だろ」

「ティード、これは俺の問題だ。止める……な!？」

その時頬を強く叩かれたことよりもカンナが怒っていたことのほうが俺には驚きが強かった

「カ……ンナ?」

「お兄ちゃん家族の前でそんなことは絶対にしない人です」

「これは……そうか、ルナこっちにおいで。」

「ふえ、うん」

トテトテと走ってきたルナを抱き上げ再び二人組みの前に立った

「な、何だてめえ!!やんのか!？」

「俺の家族に手を出すのなら容赦はしない、おとなしく帰るなら俺

はこのことを忘れる。」

「何言つてやが!?!ひい!!」

足元を軽く挟る様に蹴ると脅えたように男は兄貴と呼んでいたやつを引きずって逃げていった

「兄さん、兄さんの優しさはうれしいですがやりすぎはいけませんよ?」

「そう…だな。うん、じゃあ買い物続きをしようか」

「じゃあ、足りなくなつた食料買わないといけないんだろ?早く行こうぜアニキ」

俺はこの家族を……いや、今はこの時間を楽しむって前に決めたんだ。今を楽しまないと

「そうだなあ、じゃあ急ごうか。暗くなる前に帰りたいしさ」

「うん、早く行こう」

俺たちの買物は無事に終わった。けどあの俺を蝕んだものは何だったのだろうか？この身体にはまだ俺の知らない何かが隠されているのだろうか。けどあの神様はこんな能力をつけるなんて思えないしな

「はあ、なるべくキレイないようにしないといけないな」

今回のきっかけはルナを傷つけようとされたこと。これからをもっと家族に気を使わないといけないなあ

日常は繰返されることに意味がある。一度でもその繰返しが崩れるとそれは二度と元には戻らない。だから人間は日常を大事にするのだろう

この人生、俺達の行き着く場所が幸福であることを祈って

閑話ゝ家族との買い物（後書き）

家族との買い物、前々から書いていたのですがようやく書ききることができました。

次回もおそらくオリジナルストーリーになりそうですがどうぞよろしく願います

小説の紹介ですが、最近読んで読みやすいと思った小説はわがみちさんの『転生？外史？だから何！？』この小説よりも完成度かなり高い、ってか面白いので読んで見てください

もう一つは泣き虫力エルさんの『魔法の世界の魔術し！』これは私がこのサイトに来る前から読ませていただかせてもらっていた小説です。エミヤ好きなら最高に面白いです

それではこれからもこの小説をよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638m/>

スーパーロボット大戦OG～チートで歴史を変える少年

2010年11月2日17時39分発行